

●高澤良一 第六句集 燕音

●一月一三月

神鈴を一つがらんと年歩ます

輦れんたい 台に乗れる初夢大井川

力在るものと格闘初夢に

まあまあとみなされてゐて初寢覚

初夢の思ひ出せずにある科白

宝船ツアーといふはなかりけり

歳旦吟言葉飾らぬ生地の佳さ

風向きがガラリと変り海鼠突

もう一つ呑み込めないである海鼠

芸術劇場 高橋竹山 孤高の響き
凍むや門付一から学ぶことばかり

吹雪く町門付三味線剥げるまで

じゃみせんじよんから坊様ほさまに躓つまきて雪の原

顎引いて太棹雁のわたる空

太棹に津軽が見える雪んこ見ゆ

音色凍むほんに三味線授けもの

馬面の竹山切な返てあいや

春は華やぐ音色即興曲岩木

雁ゆかせ津軽よされの高調子

こんな句が先師にありて初昔

冬浪の白起つばかり鯨望荘

庭に富士膝に初刷手に眼鏡

東海道白妙の富士皮切りに

初刷バリを発利と車中に響かせて

雪どころ米原過ぎてべそかき空

近江八幡
おめでとうさんと安土の田烏に

初鴉安土の田んぼをとんとんと

刈り頃の芦擦りあふて湖日暮

たまさかに日当るは贅枯芦原

あなたなる安土の麦の青霞

枯芦の日に眩くを俳言と

枯芦に対す先師に対すごと

枯芦の水路は鮒の通りみち

枯芦の葉屑浮く水動きをり

枯芦の明るさあふみに来た甲斐あり

三井寺の夕凍み及ぶ大黒天

運の尽きならぬ凍み鐘突かれけり

凍みる中そもそも三井の鐘由来

三井の鐘立ち去る耳に凍み憑きぬ

駈義仲寺け巡る夢のほとりに枯尾花

夕凍みにはか也有の文台に

春小袖二人連れなる巴塚

堂守のすすめればうづ
味 は ふ て珍の芭蕉の花の蜜

巴塚寒木瓜弾け一二輪

中興の蝶夢法師の噓堂

薺生ふ朝日將軍墓所御前

供花絶えず絶やさず寒んの巴塚

木曾殿の塚に裏白侍らしめ

寒木瓜の一輪発句を吐くごとし

でかしたる丈艸の墓つつむ寒ん

破魔矢持ち膳所で降りたる夫婦かな

その昔膳所で越年都鳥

膳所泊り夢に行き交ふ初飛脚

石山寺詣ちんちん初電車

石山寺郵便局の大根注連

石山の石皚々と冬紅葉

坂本
比叡より一雨あるか実南天

楽浪の志賀に初波立ちにけり

里坊の柿の蒂見て夕暮れは

後で要るであろうと思つてその辺に転がし置く石のこと
鶴鴿の遊べり石の浪人と

日吉大社
多羅葉に一時雨あり日吉造

着膨れて山王さんに頼み事

西教寺
冬紅葉俗塵払ふ麓寺

藪巻に雪まじり雨比叡より

疾琵琶湖うに鳩目覚めて居りぬ堅田寒

練達の土なり堅田のには鳥は

瀬田唐橋くぐり遊びの鳩一つ

淡海を初手に染め上げ大日だいにち如来さん

芭蕉に「天津繪に筆の始めは何仏」の句あれば
購へり筆の始めの追分繪

息白し根本中堂常闇に

叡山の寒ンを背に阿耨あのくたら多羅

蓮如堂杉の撥ね上ぐしづり雪

叡山の雪気太ふとしし肉締めつけぬ

根本中堂香炉の煙も凍らんか

叡山の雪気柱の朱を剥ぎに

手探りの根本中堂初燈明

しづり雪をりをりありぬ谷隣

風花の舞い込む三塔十六谷

大津繪の春さきどりの藤娘

大津繪の弁慶かざす薙なぎなた刀寒

大津繪に散財始め松とれて

かいつぶり大津潜り出でたる比良面

比良夕風赤襟鳩の尻押せり

覚め際のこゑ一つしてかいつぶり

水破る音もタづくかいつぶり

春を待つ淡海に心預けんと

みづうみに諸子取れ出す白伊吹

湖国ゆく始終うしろに白伊吹

朽葉どき蓮台野より化野へ

うしろより蹤き来る嵯峨の夕しぐれ

時ならぬこれは時雨ぞ一乗寺

掌青蓮院(粟田御所)を打てるところへ寒ンの御所の鯉

杉戸絵に京の底冷え極まりぬ

粟田御所大玄関に万年青活け

踏みしめて淑気みなぎる御所量

寒鯉の叡智めぐらすごとくなり

御所に来る尾長を愛でて初座敷

総門の白蛙股時雨けり

松過ぎの肉桂のほふ五色豆

二年坂清水初商の水打てり

三年坂「雪やろ」「さうやと思ひます」

清水の小雪おっとり店構

角つこの三文駄菓子屋初商

一山の枯れ清水の舞台お圧す

初比叡洛中半分日当りて

三年坂連れ立ちのぼる春小袖

買初めの色のほのほの五色豆

冬鴟のぎうと落柿舎暮れにけり

落柿舎の閉門気遣ひ歩めば鴟

暮れかかる柿の蒂みち落柿舎へ

落柿舎の夕凍みの憑く柿古木

俳諧奉行去来の庵に夕鴟来

柿主は小倉山下儒医去来

落柿舎の年初の苔の常みどり

落柿舎の柿の蒂ほど吾も凍みて

去来の墓いかにも時雨来さうな空

しぐるるや黒みてここに去来の墓

初伊勢伊勢や腰の曲がるも何のその

春小袖うつせる五十鈴川の水

詣で日の天気がようてお伊勢さん

初伊勢やをろがむ顔も魚のごと

初東風に伊勢の神々耳すませ

をろがめる大御おおみおやがみ親神伊勢の春

初伊勢や守武ぶりの一句出来

初はつに詣でて土の宮風の宮

お伊勢さま詣でのゑびす顔続々

初伊勢の玉砂利鳴らし往路帰路

お伊勢さん詣で人出のえらき道
初伊勢の点り初めたる常夜燈
春著着て乗合自動車内宮前
初伊勢や官憲筋の五六人
初伊勢や鳩のくぐもりごゑの中
水槽鳥羽に正月顔のマンボウも
浮寝とはゆかざる鳥羽のゆりかもめ
日当りて鳥羽の水鳥真珠粒
初春の真珠選別御木嬢
冬潮大王崎の透けて鮑の産卵期
明日葉に子守唄めく冬の潮
うるめ潤目翳干す美しく干す波切なぎりの婆
初雀波切の路地をひゆんと抜け
虎河豚に三段腹はなかりけり
ゆりかもめ女顔めをすいと寄せてくる
水鳥に水の一年明けにけり
さうなのよけふから寒の入なのよ
松とれて心の内に頭擡ぐ虫
歳旦やからかひ心大事とし
俳諧は破格破格と木菟の云ふ
左義長の煙の黄竜立ち昇り
いやはやの島の階きざし 初弁天
まんぼうはまんぼう泳ぎ春隣
思ひ及ぶところをずいと青々忌
ひとまわり上の辰年賀状の主
建前をとらずにずばり冬帽子
この坂道これあるかなの玉椿
平日の氣息確かな年とせん
襟にしやきつと朝が来たりけり
本復はまだ先のこと龍の玉
血湧き肉おどるト伝読初めに
じっとしてやりすごす冬もう少し

航跡保田は氷の青さ久里浜丸
枯篠にひねもす東京湾の照り
水仙鋸南町の里を名乗りて旗標
風筋を掴み滑空冬鷗
冬浪の彼方鷗の千里眼
毛糸帽うるさくなりて取り捨つる
赴任告ぐ便り二月のワルシヤワより
恐らくは霜バリバリの朝ならむ
信念の重み睦月の一家集
咳き込んで地球踏みつけ止まぬなり
襲はれてあいたた筋肉痛の風邪
こたびは喉イタイタウイルス引当てし
こたびは胸ムカムカウイルス引当てし
寒暁を聞きしに勝る利尿剤
一日を臥して風邪寝の薄まぶた
冬枯れ野毛山動物園に長寿の象のハマ子さん
咳をしてコンコンチキノコンチキノ
マスクして蛙めき来ることのおもしろ
マスクしておのづからなる女の目
マスクして疾うに観念してゐる目
老梅の老梅たる枝苔生す枝
きさらぎの鋭さを増す木々の空
風邪抜けの目鼻外気に心地よし
夕べは鯉の煮付けに一家満ち足りぬ
海鼠拾ふ相州の浜その昔
河豚の吻くちつき嘘ばつかしといふことし
水漬クラス会の皆相当な悪漢わるばかり
東夷あつまえびすでよろし海鼠が大好きな
心配はご無用顔の海鼠とも
煮凝の如き偏見一蹴す
猩々の一物突起せる真冬
野菜涅槃凶葱の高足侍りけり

古草を渡り歩きの天道虫

のらくらと陽炎主宰月旦評

啓蟄の好きな活字と嫌いな活字

その場でふ空気が大事桃の花

恋猫の季節と云ふか黙らっしやい

新平家書き吉川英治邸継ぎし部屋梅の影

春先の風邪こじらせてああしんど

山椒の芽午後から降らなきやいいのにねえ

枝ぶりも宜しく古梅範を垂れ

重心を移して暮山梅の里みるや梅の花

山の梅疾うに匂ひの飛んでをり

梅の花スケッチ型染作家かな

恋の猫別誂えの声を出す

●四月―六月

花脣こつむじに小旋毛風立ちぬ愛宕山
走り根に花脣の風堰かれけり
花筏などとはとても云へぬもの
気が利いてルビが囀る日本語
その説に服しぬ花よ鳥よと詠む
入り鉄砲 出女 春風 出入りす
そら豆の花の勝手な思ひ込み
スイトピーつまらぬことは気にせず
干潟踏む素足の白くさみしけれ
折角の花が霞んで仕舞ひけり
このとほり櫻は場所を選ばない
ゆとりより生るゝものに花の風
初櫻先師に向ひ合ふごとく
好きな木を一つ挙げれば山櫻
櫻の幹叩き鼓舞せる男あり
楽しんでよるひるざくらあさざくら
夜ざくらを見にゆく元氣既になし
花は佳し桜しべまで見尽して
大櫻之ある哉の裁判所
春の水黙ってゐても春の水
まどろんで先師が花に遊べる図
門前の小僧のタチツボスミレかな
藤右衛門さんのはちまき花談義
花を見る心ええならええ花見
日本の櫻を他国に植う話
名庭園ならんとさくらの木も努める
人間ソメイヨシノが構ってやって咲くさくら
雨ありてあとは櫻の花次第
振り返る桜がそこにあればなり
沿線の桜見ながら汽車ぼっぱ
曙の桜どの木も気を張りて

人間の勝手放題花を見る
わからんと云ひて笑へり櫻守
花も又花を了へたら一服す
年寄ったなりの咲き方桜もす
咲く桜曆代りの世も絶へて
花噴いてぼこんぼこんの桜の幹
思ひも見よ山の桜の根の張り方
地味ありて枝隆々の山櫻
桜には桜の営みそを通す
他愛なく花を見てゐる旅ごころ
野暮天のソメイヨシノといふ勿れ
昼下り自転車来てさくら狩
萍のつつき方といふがあり
花開くまでいろいろな事があり
小粋とは物は云ひやうぺんぺん草
花降れる地べたに雀色動く
氣ふさぎの重たき花となりけり
垂直に上枝に移る花の鳥
ひんやりと手の甲に当つ春の草
二輪草あらくさ雑草一つ交へずに
花咲くと鳥もすっかりその氣になり
鈍器もて物を割る音花曇り
嘴のずんと重たき花曇り
念を押すごとくに春の雷鳴れり
ものの芽どきその辺歩いてくるといふ
思ひ切り悪き女やヒヤシンス
蹠たわのたわわ花脣踏みつけに
祖光淨稔下田稔さん信士と余寒の掌になぞる
一卷の終りの花の水に散る
男氣の筍の反りおのづから
根っからの浜っ子野毛の桜見に
海浜の雨は曲者花散らす

御本尊どぜう髻もて仏生会

何事ぞ牡丹を寺の囲ひもの
円覚寺

雪柳三千世界此処にあり

祖師さまの山へのぼらん桜どき
身延山

もう十年程俳句仲間へ一緒にさくらの世

来年も又来ておくれ花の鳥

だらしなき小児に同じ紫木蓮

一わたり歩き身延の沢櫻
いづくにて死に候とも墓を身延の沢にさせ候べく候 日蓮

土筆打ちたたき出したる青煙

紫荊己を通す色見たり

すずめのでつぼう束毎山の田を返す

花を押す南アルプスよりの風

花の鳥あれこれいふを聞き遣りぬ

花の下先師のおはち頭かな
内船寺

土筆摘む音のつくづく真昼かな

シーソーの花屑吹いて跨りぬ

青空へ一二三と飛花発ちて

田に引ける水音すずめのでつぼうに

田の隅にぺんぺん草の文を得て

クレソンの根方素通りせる水音

ぼんぼんと山桜置き遠山並み

いのちなが
寿 身延詣での紅支垂

花見客杖を忘れし身延線

緋の桃に近寄り過ぎぬ心拍音

糸櫻糸よりかけて身延山

法燈の山櫻いろ夕づきぬ

雨脚の忽ち千筋花きぶし

老若の一切を度す花の風

本山の飛花つきあたる堂障子

むくむくと大善坊の毛虫かな

身延山ひたすら空を亘る飛花

飛花よぎりけり北之坊岸之坊

うぐひすのこゑの又せり坊隣り

久遠寺の南無妙鶯ほうほけ経

当山の門徒ならねど桜狩

川原石の隙を見つけて花の塵

接骨木の花まぎれんとしてゐたり

身延山花冷からかね灯笼に

白妙の昇竜となり糸櫻

登り詰め櫻吹雪の別天地

夏は来ぬ焼津の海の魚光り
とと

浅草のカツ弁色の神輿かな

茹でこごみには鯉節ぶっかけて

たいがいにしろや牡丹の覗き見は

地のもののこれ一品と云へば蝸

齡なりに私も頑固筍飯

あめふらし好すいた事して潮溜り

磁石の針大きくふれる五月山

襟立てて越後湯沢の木の芽どき

残雪と越後訛りが耳元で
秋山郷

畑隅の雪間の桐のつくねんと

凡庸な芽吹きの色でありにけり

豪雪の爪跡芽木に残りけり

谷川の水飛沫して五月空

朴芽吹き谷川の水段きだ為して

秋山郷赤湯に春を惜しみけり

小赤沢部落駆け抜け雪解水

奥山のさくらは白く春づける

白樺の芽吹き朝日に眩くごと

わさび沢わさび養ふ水鳴れり
和山温泉

すもも咲く 飯山線しなのしらとり 信濃白鳥 たもとほる

鬼くるみぼつり芽吹く千曲川

りんごの飛花あれよあれよと千曲川

蒔きものを烏ほじくる正受庵
正受庵

葉ざくらに葉ざくらのいろ正受庵

山吹の黄を突つ切りて正受庵

菜の花の空ゆく雲も一茶風
柏原

春の蠅探せばをりぬ俳諧寺

春の蠅何をするかと見てをりぬ

春の蠅一挙手一投足の妙

一茶坊の生地たねつけ花の盛り

くらくらと花菜の中を歩きけり

一茶堂蠅虎が戸袋に

縫り来るかがんぼに胸貸しにけり

日の永く一つ目妖怪困基打図
小布施 高山鴻山記念館

緑さす鴻山妖怪財布かな

サイクリングりんごの花の高さゆく

月くりくりりんごの花の薄間に

画狂老人真筆雪中笥狩
北斎館

菜の花に北信五岳月夜かな

あっぱれなりんごの花の八分咲き

雪山に沿ふてりんごの花街道

屋蛙腹の底より啼くが佳し
岩松院

蛙合戦見守る此処が上席ぞ

鬼無里村河鹿謡へり鬼女紅葉
鬼無里

代天水息せききって駆け込めり

虎杖をへし折りゆけり鬼無里の子

戸隠山の裏手雪間の落のしゅうとめ
とがくし

田蛙のカララ躰に共鳴す

がしと雪踏みしめ見入る水芭蕉
雪中水芭蕉

水芭蕉乾きし泥を揉み落とす

水芭蕉そこはゆつくり水流れ

山水に凱歌を挙ぐる水芭蕉

水芭蕉山水くびれ流れけり

二タ三搔き股ひろげ浮く山蛙

真昼間の山雪のうへ蜘蛛あるく

水芭蕉林中に水響きけり

もう一つ顔乗り出しぬ水芭蕉

水底に倒木透けり水芭蕉

オオルリのこの森深しといふごとし

せせらぎに木五倍子そろそろ花を垂れ

ミドリ虫鞭毛使ふこどもの日

仁丹の看板健在植田中

空梅雨の下駄箱の戸をがらがらり

一生を棒にふりたるあめふらし

白詰草いちめん水上バス乗り場

翼打つ音のばつさり夏空より

ヒブダイの佳人とりわけ歯が見事
葛西臨海水族館

夏痩せてハダカイワシのご面相

のうのと髯のオジサン泳ぎけり

この槽ふねのウマヅラハギでござんすよ

涼しさもその名からしてユカタハタ

ひょうきん者ねずみ泳ぎのネズミフグ

力泳のその名もウケグチイットウダイ

ボンネットヘッドシャークの涼気過ぐ

目元涼しく「私カタクチイワシです」

竜宮の森を散策大海馬

絵師清方風も描きて納涼図
鍋木清方美術館

背鰭にて浮葉撥ね上げ池の主

馬鈴薯の花半島は曇り出す
下田稔さんを偲ぶ会 三浦半島剣崎にて

舟虫に危害加えることなんぞ

ふなばたを這ひて房ぼうしゅうぼら 州法螺貝の脚

タカノハ鯛大きく息す南風の中

刺網にかかるがらくた蜘蛛人手

舟虫の梁山泊を覗きけり

夜叉五倍子の青実南風にごつつんこ

潮吹のほの明るさを掌にしたり

枇杷黄ばむほの明るさに百日忌

●七月―九月

行々子田夫野人の唄うたふ

葭切の伝法口調に大分慣れ

青胡桃この木とことん優しき木

海陸に鈍器打ちつけはたた神

房総産鮑槽ふねよりひっぺがす

湯河原
保養所の庭木のみかん花盛り

道東行
シートベルトかちやりと締めて夏空へ

七夕竹搭乗手続カウンターに

七夕の水平飛行に入る空路

七夕の空を降り来て女満期

灼けほてる土にどすんとランディング

サロマ湖の空冷え来たり武者りんどう

えいおうと咲き出てエゾノヨロイグサ

武者りんどうこそぞりこそぞりて砂州に咲く

エゾニューアマニューウみんな似ていてどれがどれ

アマニューウと断ずるこゑも自信なげ

素足となり踏んづけてみぬオカヒジキ

入日急大傘持の太茎に

オホーツク渚を滑りをる荒布

青鷺がここにもオホーツク晴天

ご当地の赤蝦夷蟬といふを聴く

青鷺の子ここに翔べと湖の風

北辺の日の未だ高く浜苦菜

オホーツク風いでだんまり縞蒿雀

浜苦菜ほろりと風に動く砂

エゾニューウのポンポン咲ける岬なり

夏草のウナギツカミといふを引く

置物のごとき青鷺置く干潟

羅曰町海猫は女めこゑを曳き曳きて

熊ノ湯に入るも一興若葉どき

はまなすも目つむる砂州の砂っかぜ

オホーツクブルーに夏の海無辺

これより夏砂州を舞台の花宴

はまなすに空気小流れつくりけり

寝冷腹抱へて槽ふねの狼おおかみ魚うすもの

おおかみうお黒の羅うすものはおりけり

市涼し買い手のつかぬおおかみうお

夕焼けの終の光の水平線

かしゃかしゃと番屋近くに鳴く虫も

光苔見ゆかと問へば「それとなく」

流木と別の白さのシロヨモギ

弘法芝弘法麦の族やからにて

棒立ちの大傘持に沖時化て

馬鈴薯の花曇日を好みけり

海霧抜けてフォッグランプは黄青色

羅曰沖背黒鷗に海霧去来

国後島あとかたもなく海霧の中

魔がさしたやうに海霧湧きまだ引かず

水槽のホタテでんぐり返る夏

斜里町はサーモン色の夕焼けに

ドロの木より空蟬剥がしやりにけり

森若葉してセンニューウの高調子

蝦夷大葉子青空に花穂さし入れて

テラスのさき露のジャパニーズ・ローズハマナスに別名あればかな

鉄路伸ぶ限り群落ゼンテイカ

青鷺の嘴を預けし砂州の天

一輪の影の揺れづめ浜苦菜

蝦夷鹿のきよとんとせるに出逢ひけり

残雪の引つ掻き傷めく羅曰岳

逃水の直路ビートの照り返し

止まらんと瑠璃糸とんぼ間合詰め

糸とんぼ止まる所が判りけり

生ビール内地の人よと云はれ酌む

落刈のごそつかせある羅臼落

山の落なればしつかり灰汁抜けと

北辺の日を余すなくハマナスに

太陽の三時の色の麦畑

この丘の麦のツー・トーン・カラーかな

麦畑継ぎ目なく風送るなり

大旋つむじ風生まるることも麦畑

椴松の根方にひよっこり銀龍草

滝音の呪縛振り切り来たりけり

押し迫る青嶺や罷棲息地

逃水や斜里岳とろけ出しにけり

遠郭公うたたねの耳開きけり

宝石函羽田上空ぶちまけしごと夜涼の灯

神輿昇く掛声くたびれてはならず

山車獅子の晴れ着の唐草模様も古り

朝顔の大輪清水湛ふごと

かははぎの顔を迂闊に造物主

半島のかぼちやの花のパッパラバ

夏草や俳壇に撒く除草剤

衣食足り何の平成俳句哉

ブリューゲルのピア樽男ビール酌む

交し飲むビールの琥珀胃の琥珀

茶ちやびろうど天鷲てんじゆ絨かなぶんひつくり返りけり

翡翠の眼力疑ひなかりけり

皮剥は天下の珍珠火を熾せ

たとふれば男の美学冷素麺

田村草風は二手に岐れゆく

偏見はすこぶるつよし車前草村

男気の廃れたる世の羽抜鳥

定年の一年前の立泳ぎ

玉堂の昔の川の夏の音

独活の花無駄と思へば全て無駄

フジコ・ヘミング
真夏夜の黒鍵叩きつける指

百日紅盛りなりいざ極楽寺

土用浪一つ大きく勇魚いさないろ

土用浪うねりそこねるものあらず

海めくれ出して生まるる土用浪

美食家の歯音涼しうモモズメ

夏空が救ひのやうにある日なり

雌日芝は引き雄日芝は引っこ抜く

昨日より暑くなるぞと朝の蝉

浮世うきよ絵太田記念美術館
觸髅ぶつろう圖も弱冷房裡国芳展

国芳の肉筆美人門涼み

幕末絵師国芳ひろぐ怪奇の涼

振りかざすだんびら涼し怪猫圖

大名行列白狐にたぶらかされる圖

香月かづき泰男たいなん涅槃ねはん
シベリアが叩き込む黒埋葬圖

黒き顔黒き手眠るツンドラに

ツンドラの軍隊毛布を抜け靈魂

函を負ふ黒きフォルムは運ぶ人

高峰たかね温泉おんせん
吾亦紅ミロの構図を想ひをり

谷地渡る風に白シャツはためかせ

蓄む百合こづいて籠かごノ登山との風

風混める大谷地をゆく松虫草

木道に人影を見ず松虫草

だまなして霧の走れりゼンテイカ

霧冷えの肩に落ちくる縦傘

九階草霧淡くなり淡くなり

松虫草霧来る方を知れるなり

霧浴びし山の蜻蛉の羽根使ひ

吊鐘人参聞きをり霧の私ささめごと語

地ビールにステーキ木目の顕てる卓

白雨のごとログコテッジのバーベキュー

レイモンレイモントベトベイネイネ美術館
牛蒡サラダに軽井沢風コッペパン

カンバスに避暑地の風も描き込めり
避暑便りペイネのポストカードかな
ポターージュを蜂嗅ぎつけぬカフェテラス
ハイカラな日傘と出合ふ軽井沢
風通るテラスにてピザ避暑家族
風通り鯉の洗膾を待つ座敷佐久
蟬の穴程の寂しさなどといふ
枝々の明るさ増せり白雨中
真夏夜の知らぬが仏不整脈
昼餉共にして夏瘦の弟よ
布袋草きゅっとくびれるところかな
蟹のいふ事情とやらを聞きやらむ
くらげ文様六文銭に相似たり
京劇に呑み込まれをり日の盛り
晚涼の黒の勝ちたる斑ぶちの猫
割り込んでここぞと鳴ける油蟬
夕蟬にやうやう見ゆる鳴き疲れ
じり貧といふ鳴き方をせる蟬も
花火の傘爛れかつをのえぼしかな
炭酸のはじけるやうに閉ず花火
昼寝して腕むっちり如来肌
あめんぼう飛ばし過ぎなり乗り上げぬ
午からは頭も霞む夏期講座
がりがりと妻が自家製氷水
大型絵本覗き込む子の瞳の涼し
甲子園
モンスタ―生まるゝ夏の甲子園
三振を喫す唇鹹き夏
日盛りの中軸打線火を噴きぬ
もくもくと投げるエースにあきつ殖ゆ
常夏の島で鍛えしサウスポー
甲子園グラウンドを馳す大夕立
日焼せし腕ものいふホームラン

汗っかき太っちょ監督サイン出す
炎天を味方につけぬ勝投手
決勝の壁と峯雲峙てり
戦う汗涙となりぬ夕栄に
西日中バックホームの残像も
必殺を目論む妻の蠅叩
蠅叩湯呑巻き添え喰ひにけり
衣被できればごめんこうむりたい
ぬるま湯に浸りて雨降りお月さん
首尾問へばまづまづの出来松手入
小粒なる葡萄摘むに千手欲し
梅落葉散るにまかせて始末せず
葉蘭の蠅居場所を二転三転す
人間が単純になる湯に夜長
柿洪のやうな評言貰ひけり
露の日の顔の輪郭思はるる
扁平になりて千切れぬ芋の露
震災忌云い聞かす婆無うなりて
秋津島颱風窺う頃となり
花火果て闇抱え込む雄物川
鶏頭の頭の塵払ふ雨来たり
この水みずけ気頼つぺた落っこちさうな桃
刀豆の天麩羅といふごわつけり
遊行寺清浄光寺(遊行寺)薄念仏会のすすき光沢持ち始む
薄は穂に清浄光佛在す寺
*鏡縁は時宗固有の内陣の板の間で極楽の池を象徴的に表す
薄念仏唱ふや鏡縁澄むほとり
*賦算はお札くばりのこと「南無阿弥陀仏決定六十万人」
お上人手ずから賦算念仏会
艶ありて甕の薄も念仏も
白芙蓉によによ如によによ如常住のほとけなり
花すすきじゅっぽう十方衆生の願ありて
とったくさん
藤沢山野ぶだうに色のり初めぬ
足わろき上人さんの庭踊

花すすき揺るゝがごとくおねんぶつ

念仏と薄と踊る一遍と

上人の虫音のごときおねんぶつ

月岡芳年 月百姿展
水面の月槍の寶藏院覗く

仲麻呂のまなざし凜と月の海

芝神明宮 だらだら祭(生姜祭)
大門は目と鼻のさき生姜市

かはたれの芝に廻りて生姜市

瀬谷 徳善寺 萩を見る会
道思い出しながらゆく萩の寺

白芙蓉見ながら体調どうと問ふ

無常迅速生死事大と萩咲けり

多羅葉の青き実善根積めとこそ

萩叢も萩見る会も旺んにて

知己に逢ふごときやすけ萩を見る

白萩の楚々たるを寄せ掃き給ふ

鋭さを内に押さえつ青すすき

月半までお向いさんの芙蓉咲く

一段と空深くなり葉鶏頭

覚め際に一つ伸びせり保己一忌

読みかけの書に目を通す秋の雨

通院日またぞろ扇子取り出して

風船かづらぼんやりと日を過ごしをり

おくんち
長崎くんちくんちくんちと鉦囃す

万屋町 潮吹き鯨
シーポルト挿し絵に遺す鯨曳

おくんちのカラクリ鯨潮を吹く

さきびき
小鯨の前 曳祭の子がわーい

繰り出すは屋台鯨の親爺舟

本石灰町 御朱印船
祭足袋ばたばた御朱印船を曳く

印度人の傘持御朱印船上に

荒木宗太郎便乗
日本の秋一見の遠眼鏡

栄町 阿蘭陀万才
阿蘭陀万才手書きの髭も爽やかに

あっぱれの阿蘭陀万才秋天下

初孫 美雨 誕生
飲みしやぶる爽やか赤ちゃんあくびする

下田さん
養生のその後は如何に枇杷の花

木瓜の実に小馬鹿にされてゐることし

犬の名と猫の名ゆかりの糸のこ草

狗尾草英語にては
英名は緑の狐のしっぽ草

上背のあればやアキノキリン草

生酔いの箸運びけり柿脛

見栄坊の烏瓜照る村はづれ

●十月―十二月

今年また生るだけの柿生りにけり
神品の桂黄葉とうち仰ぎ

二大樹の銀杏黄葉の消耗戦

喧し屋鴟が四の五の云うてをり

綺麗事どれもつまらぬ衣被

鼻風邪を追出す手だてなかりけり

平日の鴟聞きながら稿急ぐ

桜もみちどつちつかずの色合にて

乱入の鴟の雄叫びとも聞え

郷土色豊かな柿が出回れり

独善は他にも及ぶ氷頭贈

鴟は聞き入れぬ入れぬの一点張り

枳殻に鴟の手仕事鴟の贄

遠からず蛤となる雀これ

香ばしき焼栗御説ごもつとも

綱引のづるづる旗色悪くなる

先代は大の庭好き万年青の実

人物評ざつくばらんに梨の味

沢蟹宇津谷の歩むその先靴で堰き

宇津谷の葛も了りの峠道

宇津谷の葎叩きの雨上る

だんだんと見えてくるなり棚の郁子

茲宇津山 慶龍寺に許六秋風の吟遣しけり

十団子の碑いしづみ 秋の風招よべり

青柿の尻辺に廻る雨滴かな

旅先の雨脚見つゝとろろ汁

彼岸花一本咲きぬ 宿しゆく外れ

沢蟹のことこ宇津谷地藏盆

花すすき人家といふは寄り添うて

鶏頭の暮るる暮るといへば暮れ

天帝の如雨露秋霖とぞ云うて

吐月峯
大寺の二間打ち抜き観月会

薩摩琵琶待月軒に徹りけり

重衡を弾ず無月の薩摩琵琶

天柱山闇夜転じて望の月

蜻蛉の訝しげなる眼に遭ひぬ

蜻蛉の極めて人間臭ときき季

隠坊の如きとんぼが前から来る

穂芒のまさに段平抜かんとす

この辺油山り倒れながらも泡立草

鉄漿蜻蛉おはぐろの影おはぐろを追ひゆきぬ

考えの閃く如くおはぐろ現る

糸揺すりやればどう出る女郎蜘蛛

霍乱を起して倒る稲あらん

民宿平野の茶請けの栗の渋皮煮

里人の里芋作りこの家も

洗ひ場の底にうごめく大蚯蚓

秋燕を見たりのこゑに振り返る

落栗の真新しきはこれとこれ

茶畑のその畝々の朝の虫

四鮎漁期も了り近くなり

くわりんの実なりし秋光集むるは

川波の緩急つけて芒過ぐ

十六夜の小腹に納む里の栗

十六夜の宿の枕を均しけり

十六夜の宿の障子を走らする

里芋の茎の色よき十六夜

鶏頭の小火出す火の見櫓下

山峡の百千の蟲夜を徹し

芒とる少年月を迎ふ村

川上も又川下も花芒

節々に臙脂の入る川芒

利口者猪婆曰くにまたやられけり

漁師曰く
金目漁さうさな八丈島辺りまで

長谷 御霊神社（鎌倉権五郎神社）の面掛行列
江ノ電をよぎり出発 面掛衆

*面掛行列は「仮面風流」を今に伝える文化遺産鎌倉
権五郎景政の命日に当たる例大祭は神輿渡御に面掛衆
が行列するので知られる

面掛行列ひようと「天狗」の先祓い

*面に十面あり「爺」「鬼」「異形」「鼻長」「烏天狗」「翁」

「火吹男」「福祿」「阿亀」「女」なり

おわたり
神輿渡御を待つ間「鼻長」一服す

「鼻長」をわし鼻が見る面掛衆

面掛の「天狗」の高下駄のつし

「女」が孕み「阿亀」に団扇風

*はらみつとは面掛衆のうち、おかめは妊婦の風態に
仮装し、大きな腹を抱えながら歩行する。それゆえ、

この行列を「はらみつ」と称したこともある。田楽
によく出るはらみ女の流系と見たのであるが、里伝に
よると、源頼朝が甘縄の非人の娘を懐胎させたので、
年に一度、彼らに無礼講の機会を与えた、その名残と
いい、近年まで「非人面行列」とも呼んでいた

鎌倉に裏面史ありぬはらみつと

先祓い「天狗」ぐらつくこと幾たび

をさな子の鎌倉囃子に乗り「翁」

面掛けの一戸一役里祭

玉すだれなかなか夏が逝かぬなり

腕組みしてさてどう詠まん弁慶草

山茶花に毛虫一騒動ありぬ

灸花いつまで続くこんなこと

雄日芝のすれっからしのその穂先

腕つぶし強き矢倉の蚊に螫さる

長谷観音 観光
スタンディングブツダと云はれ露けしや

饅頭に押す紅しかと国慶節

じゃんじゃらじゃん双十節の獅子現れぬ

中華獅子おどけ隣きしたりけり

青龍の胴空を切る双十節

龍舞のくねり始めぬ秋天下

皿に盛るリンゴ崩るるところを描く
セザンヌ展

西洋梨ごろんと一つ静物画

とりすます陶器のポット秋日差

上野駅出て直ぐ共同募金のこゑ

上野の山人出の秋となりあたり

赤い羽根つけて上野の森に入る

大英博物館 古代エジプト展
太陽神ラーとミイラと屋鳴く虫

石像のテーベ市長と遭ふ秋屋

死者の書は畏多しと紙魚云うも

虫音のごと木乃伊の音声ガイド洩れ

身に沁みてナイルの青の石像護符

一室に木乃伊六體そぞろ寒

*ミイラにされる際に肺胃などの臓器取り去つて入れる壺
露けさのここに極まるカノポス壺

空伝ひ町内運動会のことゑ

川上澄生
浜つ子の澄生のガス燈火恋し

黄表紙 七句
眉唾もの黄表紙ひろぐ秋燈下

黄表紙のうがち欠けたる世とくしやみ

「模聞雅話」鬼の角切りうそ寒し

燈火親し「臍の下谷」を読み始む

秋はひねもす「鼻峯高慢男」読む

秋夜読む「扱 狐通人」
さてもばけたりきつねつうじん

「他不知思 染井」に深む秋
ひとしらずおもいそめい

秋来るといふ目を鹿のしたりけり

林檎割りことしの蜜の多寡云へり

躍る身をあびせ倒して緇墜ちぬ

赤ん坊をあぶかる秋の空のもと

べつたら市べつたら市と訪ひ行きぬ
べつたら市

もう一枚上からはおりべつたら市

べつたら市ひやととする日続きけり

市初日べつたら漬の値踏みせり
もちこたふべつたら市の空模様
べつたら漬色白女将の腕ほど
角店に人のはりつくべつたら市
宮内庁御用のべつたら漬も売る
べつたら市麴てかてか粒立てり
あびせらるべつたら市の売口上
売ごゑの味見味見とべつたら市
家人よりけふよと云はれ後の月
榎の実のごろごろ道に辟易す
木犀の例へて云へば深情
一番の冷え込みありぬ蔦紅葉
とつかかる自然薯掘りの一本目
この山の自然薯あらかた抜かれしよ
くしゃみして十一月に入りにけり
セーター出すそんなきのふが過ぎてけふ
鼻風邪の鼻にかりし頼み事
隼人瓜姿無類の冬に入る
冬に入る顔決め込んで隼人瓜
冬の蠅小さき翅を折り畳み
顔洗ふ仕草幾たび冬の蠅
着古しのセーターはおり古本市
冬物の出し入れに妻余念なし
もうそろそろなどと話して毛布のこと
夜の寒し一枚多くはおり出づ
高齢化社会と百舌啼けり
十一月しよっぱなの風邪貰ひけり
建長寺 扁額
大樺もみづる「天下禅林」に
お風入れ慧可のぎよる目に立ちすくむ
お風入れ道隆さまの洗面具
虫干しの開山語録と韓櫃と

* 白沢は中国で想像上の神獣。よく人語を解し有

徳の王者の治世に出現。建長寺では風入れの守護
神とする

白描の三つ目の白はくたく沢お風入れ

無準師範筆「菩提」
ぐぐぐいと引ける渴筆お風入れ

山芋の黄葉せる道のみけり

烏瓜からす天狗が好物の

建長興国禅寺破格の枯芭蕉

破れ着の大燈国師めく芭蕉

枯れ三昧一人愉しみ居る芭蕉

全うの一語に尽きぬ枯芭蕉

尻振りて玩具めく鴨近寄り来

日比谷公園
ほぐれ初む嵯峨菊蒼おひねりめく

菊花展卒業式のごとなり

かかるのは手間のみ「如何菊作り」

菊作り答えがでると勧めをり

冬至芽の此処をと盆栽菊談義

アンドロメダ星雲さながら懸崖菊けんがいは

綿詰めがどうかうのと一文字菊いちもんじ

煌々と厚物白菊スプーン弁

晴れ舞台てふ菊苗の色を聞く

何處となう畏き菊の前に立つ

審査員何處見て菊の出来不出来

堅物は菊にもありて塵寄せず

望外の受賞と云はんばかりの菊

要するに何處どう見ればよきや菊

石路の花世間話をせるとく

酒の市横浜真金町
三つ目で地下鉄を降り酒の市

真金町交番裏のお酉さま

灯が点り枯木の間のお酉さま

神鈴の三つは忙しお酉さま

半月に風の納まる酉の市

新旧の熊手高々行き交へる

熊手の値耳打ちすれば「そりや無理だ」
値のあつて値の無き熊手よく売れる
むにやむにやとやりて熊手に値のつきぬ
縁起物働きの熊手だよ
熊手また売れたり火打ち石をちよい
とつくりセーター人波をゆく酉の市
熊手買ふ氣つぷのよさが身上ぞ
射的屋の音の中抜けお酉さま
大熊手売れて手締めのおよいのよい
手締めには手締めの応酬一の酉
酉の市人の流れに蹤くばかり
お酉さま戻りの道の落葉風
ぶつかられ躰くるりと酉の市
にぎにぎしく熊手鯛やら小判やら
熊手売手持ちぶさたの股火鉢
どれにせうずんと下がって熊手見る
派手好きの御代のきらきら熊手かな
もういっぽん先の道だよお酉さま
熊手持つ拳と拳行き交へり
新仲見世仲見世抜けて羽子板市
略服に済ますもよけれ七五三
極月のちよろちよろ動くおもちゃかな
愛着の古着のやうな冬日差し
物価高の一年杉箸割り損ず
駅前の木のかしこ聖樹の灯
年内に片づけるもの拔書きす
町内に枯木と月と銭湯と
銭湯が未だあり大つごもり月夜
がちやちやんと大つごもりのレジの音
数え日のもつさり顔が応対に
日本橋雪が舞ひ来てえらい降り
みぞれるといふこゑありて震れけり

大衆魚真鱈の顔の冬親し
日向ぼこ頭の抽出より挿話
酒量落つ話さらりと年忘
風体をとやく云はれ破れ芭蕉
鼻風邪の妻に味見を頼まれぬ
注連飾り手つ取り早く済ませけり
内祝ポインセチアを買うて来ぬ
鴉が鴉にちよつかい出して遣り合へり
逆上の鴉の癩癩玉破裂
鼻風邪の妻の言つて事細か
鼻風邪の寝付きよければ直るべし
掛かりつけ大田医院の八つ手咲く
タタッキルタタッキルぞと鴉啼ける
ずぶ濡れの鴉の平氣の平左かな
茸湯西川の名いちいち聞いて宿夕餉
宿炬燵山の夜長を如何にせん
朝日さす霜の空林空山に
平茸を栗茸を指す箸の先
山鳥の脂浮くなり茸汁
木高木の葉降るお品嘉助の山墓に
山宿の炬燵の酔ひがまはりけり
濁り酒とろつと炬燵火は赫つと
炬燵火をいっそう強くまたぎ宿
木の実とき落葉どき過ぎ落人村
道迷ふ朴の朽葉の幽界に
投函の小銭ひやつく共同湯
共同湯屋根の落葉の分厚かり
共同湯霜にこはばる身をほぐす
編みシューズ落葉の匂ひ搔きたてて
枯木風日に三便のバス待てり
枯るゝ身に熱湯をこそ湯西川
枯蔓に巻かれ混迷深める木

拾ひ上ぐ紅葉の中の艶紅葉^{あで}
枯蔓の横暴極まりなき立木
枯蔓の末路を晒す川つぶち
枯蔓の幹に食い込む馬鹿力
犬の踏む樺落葉の音ぬくげ
一つ木に集ふ鳥と柿の数
冬靄の和気あいあいの川景色
せきれいの霜の色して岩畳
上々に紅葉仕上がり龍王峡
僕キツネ私タヌキの店師走
息づける紅葉に急所あるごとし
逗子端山散策
神業の柱状節理崖紅葉
蝙蝠のやうに下りて枯るゝ葉あり
ほうほうと云ひて拾へる朴落葉
林道の細長落葉丸落葉
爺^{じい}さまの口許に似て隼人瓜
裸木の光と蔭の部分かな
がまづみの實やこの谿の鳥たちに
がまづみを漁れる小鳥無我夢中
落葉道どっこいここに走り根が
頭を掠め空林に入る冬の禽

ユリの木の皆落葉して木偶の坊
蠅螂の翅まだ青き十二月
いろいろある種子の飛び方草の実展
シクラメンぼかしてポートレート撮る
髪刈って頭の頼りなき冬青空
心臓の葉に加へ風邪薬
浅草の師走に遊び牛鍋屋
極月の火に煽られて中華鍋
雷門脇の日向の師走猫
青空に飛距離を伸し散る木の葉
街の木は枯れてタンゴの鼻濁音^{ダリエンス賛歌}
コントラバス靴底でとるリズム冴ゆ
レーニン風唄い手の額灯に冴えて
路上に舞ふ落葉とブエノスアイレスの雀
ブエノスアイレス負け犬に吹く枯木風
枯るゝ夜をジーラジーラと唄い出す
口許が割れて洩れだす夜のタンゴ
ジョーカーの裏でくすりと夜の笑ふ
バイオリンずいこずいこと「颱風」ひく
バンドネオンに翼枯木の宙を舞ふ
痩せぼっちのキリストを吹く枯木風